



鳥取市文化財報告書 8

ヒル山砦跡
熊田古墳 発掘調査報告書

1980

鳥取市教育委員会

ヒル山砦跡発掘調査報告書

1980

鳥取市教育委員会



序 文

現在、鳥取市内には多くの名所・旧跡がみられるが、そのうち久松山鳥取城跡はとりわけ市民のシンボルとして、又、憩いの場として親しまれている。

この鳥取城にまつわる出来事として「鳥取の湯殺し」といわれる羽柴秀吉の兵糧攻めは、岡山高松城の水攻めとともに有名である。この鳥取城攻撃の本拠地本陣山を含め各所にこれに関連すると思われる城・砦・陣所跡がみられる。

今回調査したヒル山砦跡は、古史料文献上からも明らかに秀吉側によって構築されたものと考えられ、鳥取城攻防戦における攻撃側の実態を知る上で貴重な資料である。

発掘調査はこのヒル山砦の一部分が開発行為によって消失することから、これを記録に留めるために実施したものである。

なお、この調査を行うにあたり、調査の指導並びにご助言を頂いた県立西工業高校校長山根幸恵先生に厚くお礼申し上げるとともに、調査経費等側面的にご援助・協力を頂いた御不動産企業、海海南開発各位に対して深く感謝を申し上げる次第であります。

昭和55年9月

鳥取市教育委員会

教育長 濱 本 魁



ヒル山砦からみた久松山鳥取城遠望

目 次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	5
IV 後 記	18

挿 図

第1図 周辺の城・砦跡	3
第2図 ヒル山砦位置	6
第3図 地形実測図(調査前)	8
第4図 平面実測図(調査後)	9
第5図 調査後の地形実測図及び遺構構築状況確認トレンチ配置図	14
第6図 トレンチ断面地層実測図	15~16
第7図 ヒル山砦遺構要図	17

例 言

- 1 この報告書は、鳥取市浜坂地内において、海南開発網、不動産業網が企画した宅地造成事業に伴い、事前に発掘調査したヒル山砦跡の報告書である。
- 2 本調査は、鳥取市教育委員会が組織した調査団によって、昭和55年5月6日から昭和55年6月30日にかけて実施したものである。

調査団は次のとおりである。

団 長	浜 本 憲 (市教育長)
指導・助言者	山 根 幸 恵 (鳥取県立西工業高校校長)
委 員	安 治 重 美 (市教育次長)
	田 村 章 三 (市社会教育課長)
	谷 本 勝 美 (〃 補佐)
調 査 員	河 根 裕 二 平 川 誠 小 杉 宗 雄
庶 務	大 石 清 人
会 計	井 上 清 司 倉 益 紀 子

- 3 本図レベルは海拔高であり、また実測図の方位は磁北である。
- 4 本書はⅠ・小杉、Ⅱ-2・山根幸恵氏、Ⅱ-1・Ⅲ・Ⅳは河根が分担執筆し、挿図・トレースは杉谷英恵子が行った。

I 調査の経過

1 調査に至る経過

鳥取市の東北部、丸山から浜坂・覚寺に至る国道9号線沿線は、近年特に宅地造成等開発著しい一地域である。

おりしも2月中旬、当該調査地となった山地の一部樹木の伐採が行われ、明らかに宅地造成計画のあることが周辺の宅地化現象の状況から推察された。この山地における埋蔵文化財等については、鳥取県遺跡分布地図に城跡地として記載されている。

そこで、事業者へこの旨を連絡すると共に、本市教育委員会の職員及び県文化財巡視指導員の若林氏が現地視察を行った。この結果、当該山地は土塁と平坦地の郭を伴う城跡が存在することが再確認された。

この確認にもとずいて、市教育委員会は事業者に工事計画からこの城跡遺構の所存する部分の除外を希望したが、諸々の事情により計画変更は不可能であった。

昭和55年3月13日、文化財保護法第57条の2の規定により発掘届が文化庁長官あてに提出され、その回答次第によっては、事前の発掘調査による記録作成もやむをえないものとなった。この発掘届の提出に伴い、事前調査に関する調査経費・調査期間等の協力体制についてあらかじめ協議を行った。

同4月14日付けで文化庁からの事前発掘調査を実施すべき旨の通知が事業者になされた。

これを受けて事業者は調査について市教委との協議に基づき、市教委の編成した調査団に調査を委託した。

4月28日、事業者と委託契約を締結。実質的に調査開始となる。

この調査に必要な資材について一輪車、精密測量機械、写真機等については事業者の現物貸与を受けており、調査の完了とともに返却した。

2 発掘調査の経過……日誌抄

5月1日 発掘資材搬入。

5月2日 現地協議。山根幸恵氏より調査上の留意点、方法等について指導を受ける。

5月6日 地区設定及び測量上の基準杭を設置。

5月7日 現状の測量を開始する。

5月8日 大木の伐採及び西側斜面に登山道を作る。地形測量。

5月9日 地元より作業員参加。テント張り、雑木の伐採を行う。地形測量。

5月13日 南端の平坦部にトレンチ設定。発掘作業開始。地形測量。

5月16日 現状の発掘完了。調査地内の表土ハギ開始。事業者と現地打合せ。

5月20日 トレンチの実測等の記録を行う。

5月22日 発掘作業地以北から山頂までの平坦地遺構の略測を開始。

- 5月23日 表土除去作業。
- 5月24日 全体的な表土除去作業は終わったが、立木の抜根と整地作業。
- 5月29日 北方山頂部までの略測。
- 5月30日 表土除去後の遺構の地形実測を開始する。土塁部の東側より縮尺四十分の一行う。
- 6月3日 県文化課亀井氏等3名来訪。
- 6月5日 地形図実測完了。平面図実測開始。山根幸恵氏来訪。助言を受けると共に鳥取城についてのお話を受く。
- 6月6日 実測完了。近隣の山の特跡等の踏査をする。気温32°を記録。
- 6月9日 遺構検出作業。第2郭部にピット1ヶ所検出。
- 6月11日 土塁南東部の縦割を行う。
- 6月12日 土塁北西部の縦割を行う。
- 6月13日 第2郭部の構築状況及び石垣状石積遺構等の状況把握のためのトレンチを設定する。
- 6月19日 各トレンチの測量を開始する。
- 6月24日 南西隅の櫓台状遺構へ土層観察及び遺構の有無の確認のためトレンチを設定する。
- 6月25日 業者、地元等関係者を対象とした現地説明会を行う。参加者30余名。
- 6月27日 測量作業、写真撮影等が完了し、一応現地における調査は完了する。
- 6月30日 資材類を後片付け、搬出。



調査風景



調査風景

II 位置と環境

1 位置

今回調査を行ったヒル山(昼食山)は、鳥取市浜板字ヒル山及びウツロ谷に所在する。鳥取市街地の北方にあり、鳥取駅より約4kmを計る。鳥取平野の東端、北部に位置し、北は鳥取砂丘、日本海をひかえ、東の山系、開地谷より尾根続きにコブ状につき出た小段である。西は丸山をかすめ、鳥取平野が広がっている。鳥取平野を形成した千代川はかって、丸山の西の山下より浜板部落に達し彎曲し



1. 鳥取城跡 2. 丸山城跡 3. 木陣山砦跡
 4. ヒル山砦跡 5. 道場山砦跡 6. 秋里砦跡
 (昭和55年6月現在遺構のみられるもののみ)

第1図 周辺の城・砦跡

て日本海に注いでおり、水路交通の要をなしていた。南は円護寺川によって形成された狭少な平野をはさんで、太閤ヶ平、久松山、さらに北へ伸びる厩金山の尾根を望む。現在、ヒル山は砂丘へ抜ける国道9号線によって開地谷と分断されており、すぐ南は摩尼寺への道との分岐点となる。民談記等の古書によると、東南の彎曲した山裾をウツロと称し、浜坂へ向う道に大岩があり、この上の山を昼食山と号したと記されている。

2 歴史的背景

天正元年（1573）因幡の守護山名豊国は、その居城を布勢の天神山（鳥取市布勢）より久松山に移し、新しい城づくり町づくりをはじめたが、東漸する毛利氏の勢力は次第に因幡に浸透していった。永禄12年（1569）の尼子勝久らの出雲乱入支援の因幡の圧力は、豊国とその家老たちに人質を鹿野城に差し出させ、毛利の部将三吉三郎左衛門の督する所となった。天正4年（1576）5月足利義昭を援助することに決した毛利氏は、同年7月大阪の木願寺光佐を援助して、食糧・弾薬を送ることになった。7月13、14日木津川口に於て、毛利・織田の両軍は激突し、毛利氏は海戦に勝ち、武器・食糧の大阪搬入に成功したので、8月25日毛利輝元を中心に対信長大同盟が成立した。

信長は天正5年10月23日羽柴秀吉に京都をたたせ、姫路城を修築、中国攻めの拠点とした。秀吉は天正8年正月別所長治の三木城を陥し、5月出石城の山名氏政を敗走させ、直ちに鳥取城の攻撃に移った。

秀吉は若桜城を陥し、用ヶ瀬城をはふり、鹿野城の三吉三郎左衛門等を追い、鳥取城の人質を手中に収め、山名豊国に降伏を迫った。鳥取城では種々論議のすえ、秀吉の申し入れを受けることにしたので、亀井茲矩らを城番に任じ、人質を留めて鹿野城を守らせ、秀吉は軍を姫路にひきあげた。しかし、秀吉はこのままで因幡が秀吉の旗下に屈するとは考えていなかった。若狭より高船を賀露に廻し鳥取周辺の米類を数倍の高値で買占めさせ、一部を鹿野城に入れ、他は上方へ回漕させた。鳥取城では、豊国の態度を不満とする空気が次第に強くなったので、豊国はついに城を出て秀吉のもとに走った。城内では毛利氏の一族を城将に迎えたいと願ったので、福光の城主吉川経家が城将として派遣された。

秀吉はこの事あるを予期していたので、天正9年6月25日姫路城をたち、鳥取城攻めに軍を進めた。7月12日秀吉は完全に包囲し、本陣を帝釈山に置き、軍を三隊に分けた。円護寺村の山頂より浜坂道場山に陣をしく右翼軍、本陣より芳心寺に至る山背上に陣をしく左翼軍、袋川沿いに城を囲む平地軍によって鉄の輪形陣を形成した。

ヒル山の砦は右翼軍の垣屋隠岐守の砦で、鳥取城の出城丸山城を指呼の間に正対する要地である。丸山城は鳥取城にとっては海路より毛利氏の救援を受けるための要衝である。従って、ヒル山の垣屋隠岐守、その背後高地の高野駿河守、道場山の青木勘兵衛は丸山城を扼する重要な任務を持っていた。

毛利氏の救援は遂に来たらず、鳥取城の食糧全く欠乏、人肉を喰うに及んで、城将吉川経家は10月25日切腹、部下の助命を願い鳥取城は落城した。これによって秀吉は全力をもって山陽道の毛利氏と対決することができた。

Ⅲ 調査の概要

1 調査された遺構

(1) 調査の概略

ヒル山(昼食山)は覚寺と浜坂のはば中間に位置し、鳥取ゴルフ場のある山麓の続きにコブ状につき出た南北に長い卵形の尾鼻である。標高 60.2m の山頂は尾鼻の北部にあり、旧状をよくとどめる土塁を伴う郭が残されている。即ち、郭が半環状に配され、南へ延びる尾根に沿って土塁が構築され、それに接して梯状に郭が連なって今回の調査の位置まで連続と続く。土塁は途中で西側へ少し移動するように途切れて再び南へ続き第1郭部に至る。第1郭部の土塁は衝立状に、西・南・東方面を囲む。第1郭の南は徐々に地形が下がり、舌状の台地形を成す平坦面が続いている。最南端は急な傾斜で落ち込み平野部の水田地となる。

今回の調査では、工事による破壊を免れる山頂部付近の高野駿阿守の陣地跡と伝えられる区域は略測を行い、工事によって破壊される釣針状を呈する土塁遺構のある土屋隠岐守の陣所と伝えられる部分については、全面的に発掘を行い、更に遺構の構築状況を把握するためにトレンチによる掘下げをした。トレンチは第1郭部の西・南・東の土塁を横断するもの、東・西の土塁は外側面に設定した。梯状遺構部には2ヶ所のトレンチを設定した。第2郭部では中央部に東西に横断するトレンチ及び南北のトレンチを入れ、南部平坦地に1ヶ所のトレンチを入れた。



ヒル山麓からみた太閤ヶ平遠望



東の山より見たヒル山

(4) トレンチ調査の状況

ヒル山の南端、釣針状にめぐる土塁の南に一段低い舌状に延びる尾根が続き、その途中にいくつかの平地が認められる。稜線部には軟質岩が露出し、通路状の痕跡が南北に残されていた。平坦部は尾根の中央部の高みを削平し、東西の両脇にならしたものである。この区域で特に四ヶ所の平坦地が確認された。中央部東に東西に長いトレンチ(2×11cm)を入れた結果、地層は軟質岩が不規則に露出するが、岩盤及び礫層(Ⅰ層)、旧地表層(Ⅱ層)、盛土層(Ⅲ層)、現地表層の層序をなす。旧地表層は、中央部は削平されている。露出する岩盤は平板なも

のが多く、削平時にある程度の面取りを行ったものであろう。その中の一つに一ヶ所の柱穴状の遺構が確認された。20×25cmの正形状のものであり、掘さくの痕跡が縦方向にヒダ状に残っている。

他に遺構、遺物等は検出されなかった。



第2図 ヒル山砦位置

削り取る程度のものであったため、その作業にはノコギリ、ハサミ、唐鍬が主な道具となり、相当の労力を費した。発掘は地層観察用の土手を南北1本、東西3本を残し全面的に行った。

つぎにそれぞれの遺構について概要を記す。

◎ 第1郭

南北約20m、東西約6mの規模を持つ削平地である。旧態さく寛の絵図の中に拾間・四間と記されており、ここを指すものであろう。垣屋隠岐守の陣所の主体部と日される。北部で緩く下る通路で第2郭及び山頂方面と連絡する。西・南・東の外辺を土塁が衝立状にめぐり、郭の内外的高低差によって防備の効果をもつ。南西のコーナーに橋台状の遺構を残す。

5cm前後の黒褐色腐植土を剥くと淡褐色土の地山層に軟質の硬岩が散在する。これらの自然岩は削平時に面取加工も行っている様子を弱わせる。小高な山腹線中央部を削平し、掘削土は土塁として周囲に盛土したものである。南西隅の平板な岩盤中に2ヶ所の柱穴状の遺構が検出された。径20~30cmのもので棒状の器具による掘削の痕跡が数条残っていた。他に郭内における建造物等の遺構、及び遺物は検出されなかった。

(ロ) 調査された遺構

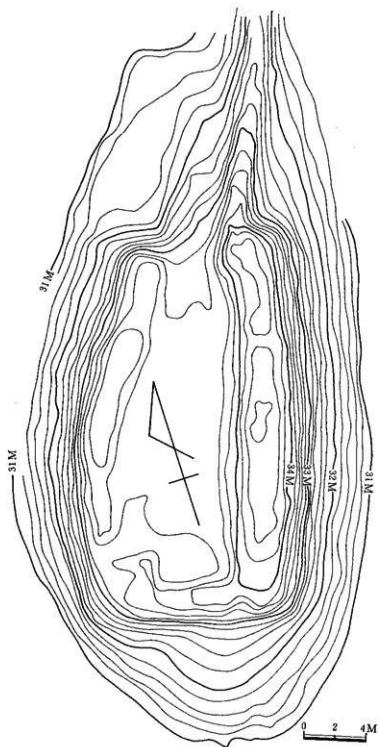
旧状をよくとどめる遺構は標高約30メートルの丘稜尾根の中腹部(「旧態さく寛」古絵図によるといわゆる垣屋隠岐守陣所となっている位置)に土塁をめぐらし、北方に虎口をもつものである。調査範囲は工事により影響を受ける南北約40メートル、東西最大幅約15メートル、面積にしておよそ400平方メートルを実施した。遺構は類別すると土塁、平坦部の郭、橋台状遺構柱穴状ピット、土壇状ピット、石垣状遺構に分けることができる。これらの遺構はいずれも表土の腐蝕土約5~10センチメートルを除去して検出されたものである。表土の除去にあたっては、樹木の地下茎の密である地層の中途を



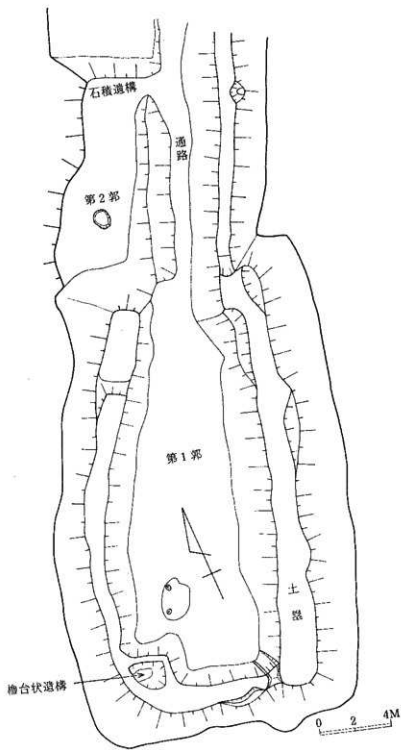
発掘前の調査地（北より）



発掘後の調査地（北より）



第 3 图 湖州地区图 (湖州府)



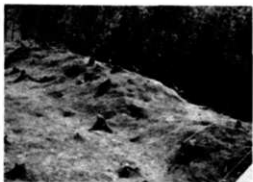
第4圖 平面実測図(調査後)



土壘東側（北より）



土壘東側外斜面（南より）



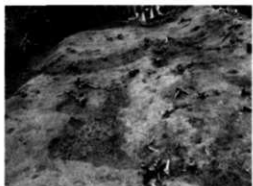
土壘西側（北より）



土壘（山頂へ続く土壘）（南より）



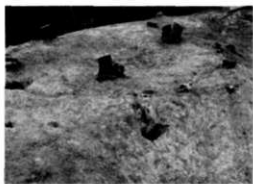
第1郭全景（北より）



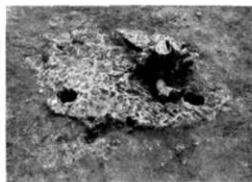
第2郭全景（南より）



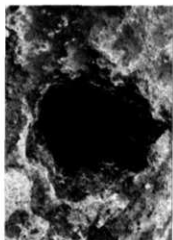
檜台状遺構（東より）



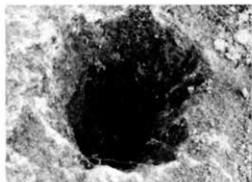
檜台状遺構（東より）



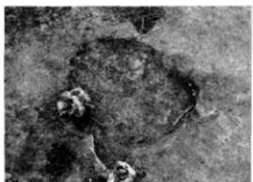
ビット状遺構①（西より）



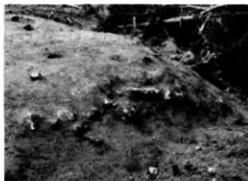
ビット状遺構近接写真②



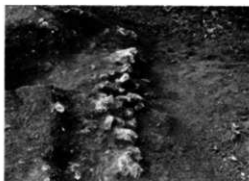
ビット状遺構近接写真③



土壇状遺構



石垣状遺構確認前



石垣状遺構確認後

◎ 第2郭について

第1郭の虎口より山頂方面へ伸びる土塁の西脇に沿って、緩やかに下る通路に沿ったほぼ長方形の平坦地である。第1郭床面よりおよそ2メートル低い位置にあり、ほぼ水平な平地である。規模は東西約3メートル、南北約10メートルを計る。表土削平及びトレンチの結果、南東隅部は面取りの加工をした軟質礫岩盤があるが、これは平地構築のための削平によって生じたものである。削平によって生じた土砂は北西方向の低地に積まれている。特に北西隅の肩部に入頭大の礫を積み、土止めとなしている。郭の南中央部に径約1m深さ約15cmの土壌状の遺構が一ヶ所検出された。他に郭内において遺構、遺物は検出されなかった。

旧塁さく藍の略絵図には特にこの施設は描かれていないが、巨屋懸岐守の陣所の主体部である第1郭部に付帯する施設として何らかの役割りを果していよう。

◎ 土 塁

山頂より南の斜面を下ると平坦になり、土塁が南へ伸びる。山頂より下る土塁と喰違いとなる。約70m走行すると西へ折れて約10m、さらに北へ約20m走行してとぎれる。北で開いて東・南・西をめぐる釣針型を成すものである。東側土塁の規模は基底の巾約6m、上縁巾1.5メートル高さは郭面より約0.7～0.9m、外縁より約2mを計り、以下南面部の基底巾3.5m、上縁巾郭面より0.5m、外縁より1.5m、西面部の巾4m、郭面より0.5m、外縁より1.5mを計る。このように第1郭を外縁より高くして土塁を衝立状に廻らすという構造を持っている。東面する土塁は第1郭部で高く、北の通路部で約0.6mの落差で低くなっている。土塁の西面部においても北部の約4mは30cmの落差で低いことが認められる。各トレンチによって土塁断面の地層を観察すると、軟質岩の礫地山を基底として①旧地表層（黒灰色土）②盛土層③表土層（黒褐色腐植土）の層序が統一的に見られる。旧地表層は、土塁の内側の郭部は削平されており、外縁部に従って所々に認められる。盛土層は各トレンチによって様々な層序を持つが、基本的には郭部の削土及び礫を順序よく盛土した様子が窺える。即ち中上位に礫が多く含まれる。土止めの効果をも合せ持つ構造である。塁上における施設（櫓、乱杭等）は不明であり、遺物も検出されなかった。

㊦ 櫓台状遺構

土塁の南西のコーナーは内側に鉤型に折れ、1平方メートル程度の平坦なやや高みの台状を呈する。二ヶ所のトレンチの結果、土塁を築造した後に盛土して構築していることが判る。遺構の内外に柱穴は検出されず、櫓を組んだかどうかは不明である。遺物も検出されず、具体的な性格は不明であるが、内側の郭部に炭片を含んだ部分があり、付近には柱穴状の遺構がある。

㊧ 通路について

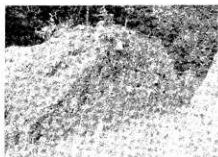
第2郭の北東部から、東面する土塁に沿って通路があり、第2郭遺構の以北と第1郭と連絡する。緩く第1郭へ登りながら、1m前後の巾を持ち、西の肩はやや崩れて、第2郭となる。表土を剥ぐと、軟質礫の岩盤が散在して露出する。ここにおいても削平され、土塁を築造している。通路に沿った土塁は北に向い緩く傾斜し低くなる。遺物の検出は見なかった。

㊨ ビット状遺構について

ビット状遺構は南端の台地状部に1ヶ所、第1郭に二ヶ所、第2郭内に土壇状のもの一ヶ所が検出された。南端の台地状郭部及び第1郭内の遺構は、面取りされた礫岩盤に残されたものであり、規模はほぼ同じである。遺物は全く検出されなかった。楕円に対応するビットが検出されなかった為、建造物等の施設の規模・性格など判明できなかった。

㊩ 石積遺構について

第2郭の北・西の肩部は人頭大前後の礫によって土止めを施している。郭の西側は急斜面であり、多量の盛土を支える意味から削平時の礫を有効に用いたものであろう。石組は無秩序であり、石垣と呼べないにしても、その機能を果たしている。自然の地形を最大限に利用して、素朴ではあるが、理にかなった土木技法の一端をみることができる。



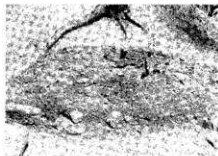
土塁断面 T-2



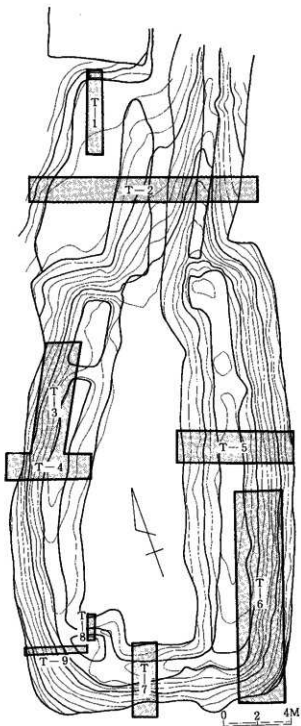
土塁断面 T-4



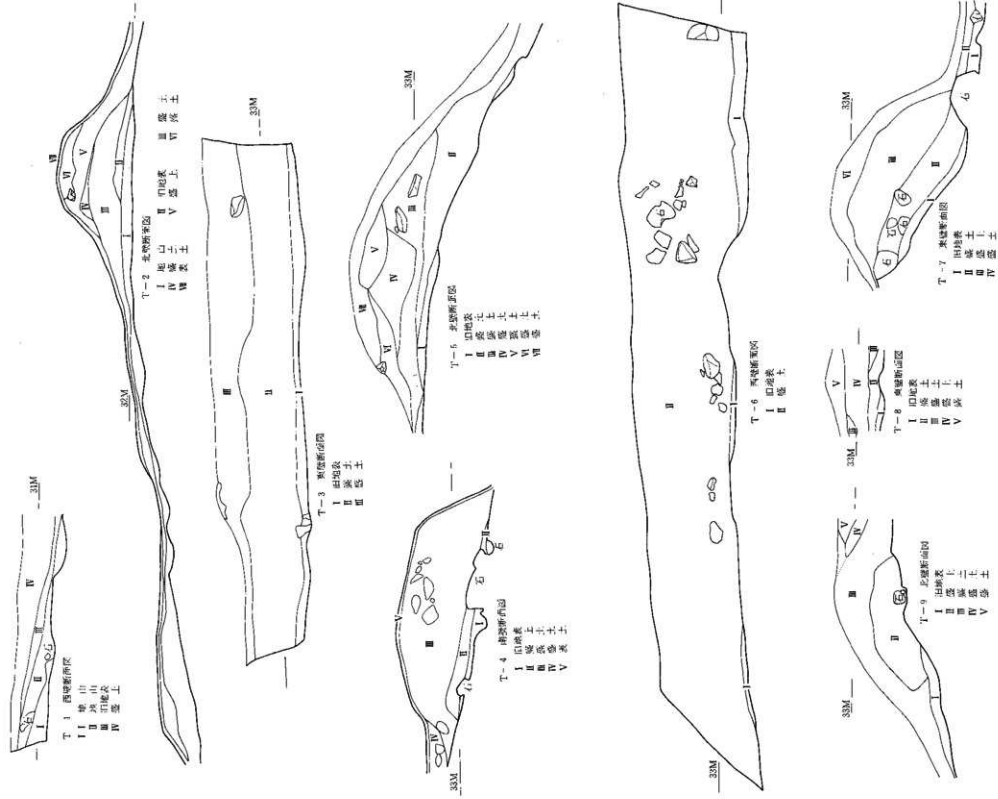
土塁断面 T-3



土塁断面 T-7



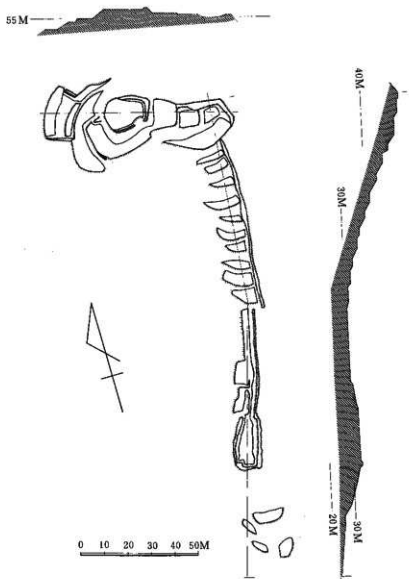
第5図 調査後の地形実測図及び遺構構築状況確認トレンチ配置図



第6図 トレンチ断面地層構造図

(2) 山頂へ続く遺構について

山頂一帯及び南の斜面は工事区域外であるが、ヒル山城跡の全体像を把握する為、略測を行った。この区域は旧態さく壁によると大岩ノ上、高野鞍河守の陣所として、略絵図及び地取之図が描かれている。山頂付近は環状に郭を配し、本丸の郭は南北六間、東西八間と記されている。南斜面には土塁に沿って梯状に郭が連なる。精細な調査はできなかったが、今回図化したものを記載した。(第7図)



第7図 ヒル山城遺構要図

後 記

ヒル山城跡は1581年(天正9年)羽柴秀吉の鳥取城攻めの際築造された要害であり、鳥取城包囲網の拠点の一つである。ヒル山には二人の武将が陣を張った。山頂部は高野駿河守であり、南麓の台地には垣屋隠岐守が陣を張った。今回の調査では工事によって破壊される、垣屋隠岐守の陣所跡に土休が置かれた。当城跡は保存状態のよい土塁が廻り、中世城郭の様相を呈していた。遺構内の建造物・杭等の跡を期待したが、不明であり、遺物を見なかったことも考察を要する。構内遺構についても不明な点が多い。狼狽台とみるむきもあろうが研究を要する。土塁については自然地形を巧みに利用した築造方法が解明できたことは一つの成果であろう。

隠岐守の陣所は高野駿河守の陣所の出張の前衛部として考えられる。又、周辺への見晴らしの良い地形からみて連絡の城という性格を検討する必要があるだろう。

幸いにも秀吉の鳥取城攻めについて記録する古書、古絵図等が残されており、参考となるものである。ヒル山城跡についても実測図に近い地取之図が残っている。尚、高野駿河守の陣所跡については略測であり、今後の精密な調査が課題として残る。中世城郭の調査はその緒についたばかりであり、他の城跡の調査が進むにつれて、ヒル山遺跡の性格も明らかにされてこよう。

なお、発掘作業に従事された方々は次のとおりである。

米原 芳恵、山根きみ子、武内きみ子、坂田千代乃、紙上百合子、田崎三津子、神崎きよ子、岸本美代子、森田 みき、田中みつえ、坂田たか子(以上地元浜坂)

黒川 浩、前田 均、山本 修一

(順不同)



発掘調査完了をひかえて現地説明会(6月25日)

熊田古墳発掘調査報告書

— 県営鳥取地区広域農道（辛川工区）建設に伴う —

1980

鳥取市教育委員会

目 次

I 調査に至る経過と調査経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 遺溝について	4
IV 出土遺物について	7
V 結びにかえて	13

例 言

- 1 本書は鳥取市福井字熊田地内の古墳1基の緊急発掘調査の記録報告である。
- 2 調査は鳥取市が鳥取地方農林振興局の委託を受けて鳥取市教育委員会が実施したものである。
- 3 調査期間は現地調査が昭和55年4月17日から5月31日、遺物整理並びに報告書作成をその後から11月30日まで実施した。
- 4 本書の作成にあたって遺物実測、トレースは杉谷恵美子が行い、土器の復元は山形顕応が行った。本文執筆は1-1を小杉が行った外は全て山形が記述した。なお本文中の土色及び土器類等の色調表現は、農林水産技術事務局監修の『標準土色帖』によるものである。
- 5 図中の方位は磁北を示す。レベルは海拔高である。
- 6 現地の調査作業は、調査員山形顕応のほか黒川浩・前田均によってすすめられた。

I 調査に至る経過と調査経過

1 調査に至る経過

熊田古墳は昭和54年9月、県営広域農道辛川工区建設工事に伴って発見されたものである。

御熊から辛川を経て吉岡温泉を結ぶ道路の北側に隣接した場所にあたり、すでに同古墳は石室の石組の一部を残すのみで、ほぼ消滅に近い状態であった。このような状態で長期間放置されていたため、この石組と古墳との関連が疑問視されるほどであった。

今回の広域農道建設工事と古墳の保存については、その工程上現状保存は望めない状況にあり、やむなく記録保存のための発掘調査を実施する方向となった。こうしたなかで、昭和54年9月25日付けで遺跡の発見通知が鳥取県知事から文化庁長官へ提出され、市教育委員会としてもこれの取扱いについて発掘調査による記録保存処置もやむおえない旨副申している。

発掘調査は原因者である鳥取地方農林振興局の調査依頼を受けて、昭和55年4月に着手することとなった。

古墳の発見から約半年間以上経過してからの調査着手であるが、市教育委員会ではこの間古海遺跡等の発掘調査を実施中であり、調査員の配置ができないことと、工事行程上の折合いとが可能であったためである。

調査の実施にあたっては、山形顕彰氏を調査員に迎え、補助員2名を配置し現地調査に二ヶ月間、遺物整理をその後調査員の都合等を勘案しながら実施することで、昭和55年11月末までを調査期間として実施したものである。

2 調査の経過

80年4月10日、現場にテントを張り、調査用器具及び発掘用道具を搬入、現場附近の踏査と杓打ち並にレベルを引いて調査にかかる準備をする。翌11日は墳丘部の測量。後4日間作業を中止して16日現場へ行って驚いた。もともと現場附近一帯は、土地の農家が稲の種苗用に使う土壌採取場となっており、露出している玄室部から新たに土壌が掘り採られ、土壌採取中玄室部にあったと思われる土器片が側壁の石の上に載せられていた。急遽立入禁止の立札を出すと同時に土地の方々に接触し、埋蔵文化財に対する認識を新たにしてもらうべく努力する。土地の方々との交流が深くなるにつれ、当地方に就いての知識を得ることができた。現場での調査は5月31日降雨でさえぎられたものの、のべ日数37日間をもって終了することができた。

II 位置と歴史的環境



第1図(上図) 黒丸印は古墳、斜線印は遺物散布地、凸印は城跡
 第2図(下図) Aは視調査古墳、Bは未調査の古墳

古墳は湖山池西岸松原より、御熊を経て気高町へ抜ける道と古岡温泉より辛川・御熊を経て白兎へ抜ける道との交点より、500 m位辛川寄りに位置し、松原・金沢・大畑・古岡温泉を含む沢野から北西に小丘陵で隔てられた福井より辛川へ伸びる谷合いの耕地を見下す北西段丘上にあり、湖山池より2 kmばかり西南西に入っている。この段丘より北側田の面までは約8 m、東側田の面までは約16mの段差があった。

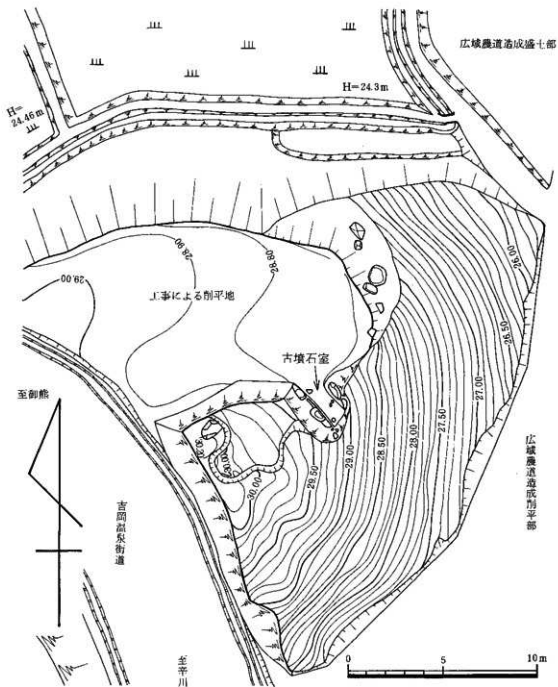
古墳のある地域は鳥取市の西端に近く、古墳等の分布未調査地域にあたり、今回の調査で第2図B地点の古墳、第1図古岡温泉より大畑への途中左側丘陵上の5内至7個の小円墳、最近、若林文化財保護指導員の報告に依る白兎神社丘陵上の円墳と徐々に分布地図に書き加へられつゝある分布未調査地域である。

湖山池を東岸より見ると鳥取大学構内・三浦附地・天神山・布勢・大桶と道跡は続き、南岸は柱見・高住・青島・寒ノ谷・松原遺跡と続き、西岸は福井・三津遺跡とつながる。

此等からは縄文前期(柱見)より縄文中期・縄文後期・弥生

と連綿と続く集落址や古墳及び中世の城跡集落址等がみられる。

現在調査対象の古墳にしても、上記湖山池周辺の遺跡同様古来脈々として連らなる人間の息吹を同古墳で表探された石礫より感じ取る事ができた。



第3図 地形実測図(調査前)

Ⅲ 遺構について

墳丘は福井より辛川に向かって西南に伸びる谷合の耕地へ、西より東へ突き出した丘陵先端の段丘上にあり、その段丘は辛川より御熊への古岡温泉街道によって本体の丘陵から分断されていた。古岡温泉街道と造成中の広域農道で西側と東側を失った段丘は、土地の農家が稲の種苗床に使用する土壌の採取場となっており、至る所、所かまわず表土が剥ぎ取られていた。昭和18年頃の丘陵は開墾され竹藪が栽培されたとか、終戦後は煙草畑となっていたとか聞く。当時の話を聞くに、この丘陵は別段墳丘のあるべき場所が小高かくもなっていない。土地の古老の話しからも、その人の知る限り小高くなっていたことは知らぬとの事、古くより削平されていた事が知れた。

古墳はすでに玄室部が露出されていた。古岡温泉街道を造る時、段丘西部は掘り割られているが、その残土は何処へ持って行かれたか調査区域内からは発見できなかった。その後、残された段丘北側1/2位が、この丘陵上部にゴルフ場を造成する際の作業小屋を作る為に削り取られ、古岡温泉街道と同水準まで掘り下げられた。その際重機によって玄室後部壁の岩石は掘り上げられている。それ等岩石の捨てられた場所には、5～6個の側壁に使用されていたであろう凝灰岩の岩石が見受けられた。玄室後部壁の岩石抜き取り穴は3個なので、他は上に乗っていたか、玄室内部に落ち込んでいたものであろうと思われる。

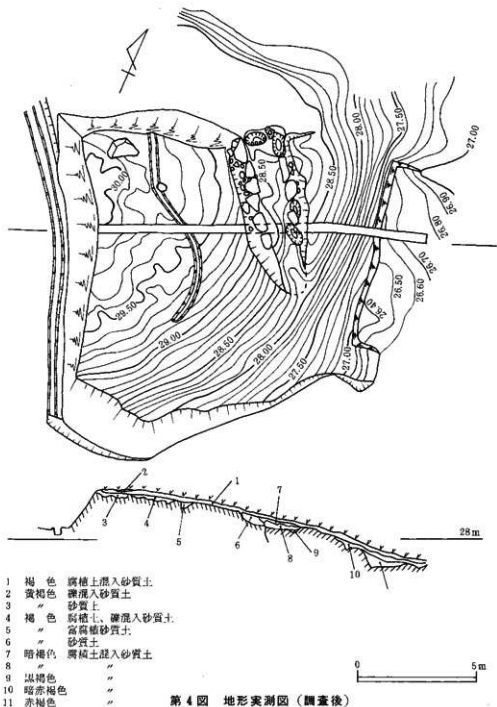
羨道部に直角に30cm巾のベルトを残して表土を剥ぐ、羨道部を中心にして約6mの円がえがけるように土器片の点在がみられた。特に西南部に多くの土器破片が散在していた。調査初期には、削平された墳丘の周溝底部が検出されたものと考えた。たしかに10cmコンタの測量図では表現し得なかったが、羨道部を中心として西北より西・南をまわって東に近くまで6m位の位置に段差のあるのが見受けられた。一方石室にはほぼ平行で西側約5mの位置に、土層より推察して墳丘が削平された時乃至その後には掘られたと思われる巾約35cm、深さ約30cmの溝があった。土地の古老に聞いても知らぬとのこと。用水路として水を流した痕跡はなく、土器片の落ち込みもみられず、ただ腐植土が蓄積されているのみ、考え得ることは墳丘を削平し、畑地として利用したか又は何に利用したかは判らぬが、丘陵上部よりの湧水や流出水の阻止溝として掘られたものと想像された。

石室内部の掘り下げと同時にベルト部分の断面調査をしてゆくうちに石室東側に矩形の溝が検出された。この溝は位置的にも角度的にも石室とは不約合で異質の感がした。溝底面はほぼ平で石室側が低く内傾していた。この溝の底部からも土器片が検出され、玄室部や羨道部より出土の土器片と同一個体となるものもあった。更に少量の溝への流入土をかんで側壁に使用されていたと思われる岩石も出土しており、この墳丘は早期に多少破壊されたのではなからうかとすら思えた。この墳丘に矩形溝一つとは不約合に思えたので他の部分を再調査したがそれらしきものは見当らなかった。

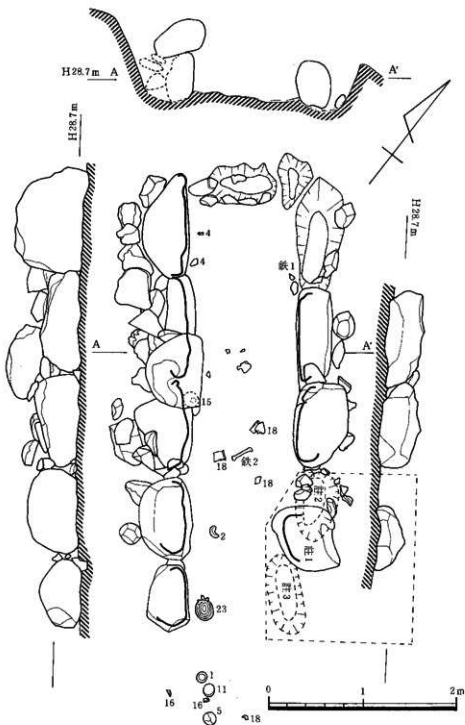
石室部を掘ってゆくや玄室部、羨道部に相当する所にくずれ落ちたと思われる小岩はあったが、みな落ち込んだと思われる土塊を下にかんでおり、羨道部に相当する位置左側に土器類が置かれているもの

の閉塞石に相当する石は見当らなかつた。

この墳丘の築造は先づ地山を掘って石を組み、石室を構築した後、東側矩形の溝より掘り上げた土を盛土とし、更に整形の段階で周囲より円周状に土をかき上げたものと思われた。



第4図 地形実測図（調査後）



註 図中の数字は出土遺物実測図番号を記す。
 図中の破線わく内は判然としないが念のため記載した。
 註1の石は移動しており、註2の位置にあったと思われる。
 註3は石の抜き取られたと思われる跡。

第5図 石室実測図

IV 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は土器器・須恵器の土器類と鉄鍔及び用途不明の鉄器の鉄器類、それに砥石と石製の石器類である。

此等の出土品中不可解な出土品が二点あった。その一つが、円錐柱の先端を欠いた形状の土器質のもので、象形埴輪の台とも考えられ、石室部東側の短形溝中より底面と思われる平面部を上にして出土。他は出土した時馬具(鞍)と思われた鉄器で、四角形鉄棒の両端を平に打ち伸して、環状にして中空の棒状にしたものであり、玄室部から羨道部への移行地点と思われる位置へ上方から石や土壌がくずれ落ちたと思われその石や土壌に混じって出土した。

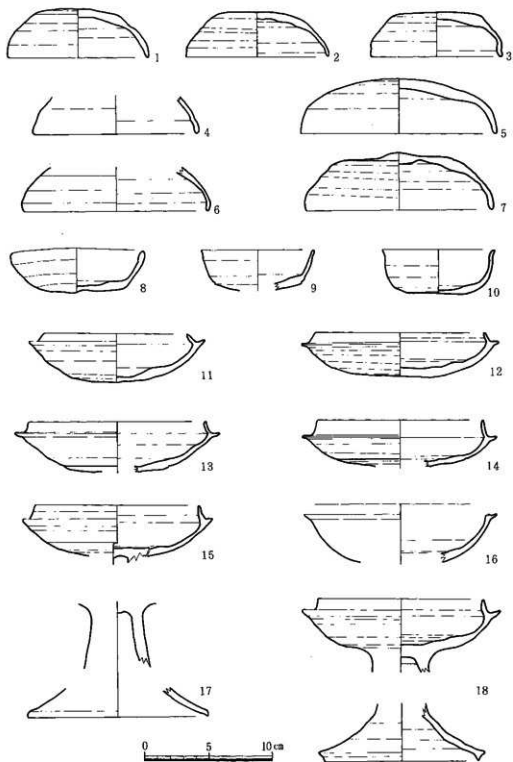
此等二点は現在今もって用途・品名不明である。

出 土 遺 物 一 覧 表

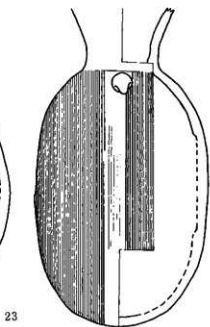
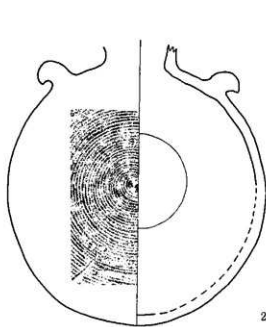
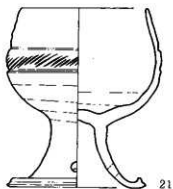
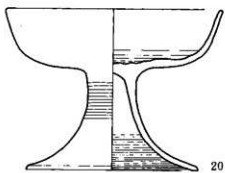
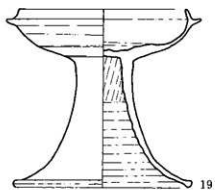
番号	器 種	出土地点	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備 考
1	蓋環の蓋 (5)	羨道部左側	器高3.8cm、口径11cm 頂部にくびれあり、鉄 供用らしく難な作り。	ロクロ右廻転、内外共 に廻転横ナデ、頂部廻 転寛切り	内面灰白色、外面明青 灰色で口縁部に暗青灰 色の煙痕あり、小礫砂 を含むあらい胎土 焼成硬い。
2	同 上 10)	羨道部左側	器高3.5cm、口径(長 径11.2cm、短径10.5cm) ゆがんでおり、胴なか にくびれがみられる。	ロクロ右廻転、内外共 に廻転横ナデ、頂部廻 転寛切り後ナデ成形痕 あり	内面明オリープ灰色、 外面緑灰色、口縁端部 灰白色。土粒を含むが 細砂でなめらかな胎土 焼成やや軟
3	同 上 (B 101)	羨道部東側 3m地点表 土上、表採	器高3.5cm、口径10.3 cm、外面典型的な作り がめだつ。口縁部立ち 上り、胴部より頂部へ 頂部とそれぞれ直線的。	ロクロ右廻転、内外共 に廻転横ナデ、外面胴 部横ナデ後寛ナデ、頂 部寛起し。	内外面共に灰白色。 土粒を含む細砂で緻密 な胎土。 焼成やや軟
4	蓋環又は高環 の蓋 (17)	玄室部	小片の為器高不明 口径約13cm、頂部より 口縁部へは内側への縮 まりがみられず自然に 広がっている。	ロクロ右廻転、内外共 に残存部は廻転横ナデ	内面褐色、外面黒色 粗砂粒を含むが、細砂 で緻密な胎土。 焼成硬い。
5	同 上 (1)	羨道部	器高4.3cm、口径15.2 cm、楕円球体を長径に そって真二つに切った 様な形。口縁部は真円 に近く、整った形勢。	ロクロ右廻転、内外共 に廻転横ナデ、廻転寛 切り、寛切後内側中心 部は任意方向への横ナ デ及び圧調整。外面頂 部半乾燥時廻転寛けず り調整。	内面灰白色、外面灰色 ごく少量の土粒、砂粒 を含むが細砂で緻密。 なめらかな胎土。 焼成硬い。
6	同 上 (B 106)	羨道部東 2m地点表 土下部。	小片の為器高不明。 口径約14.3cm、口縁部 約6mmの位置で内転し ている。	残存部でみる限り、ロ クロ右廻転。内外共に 廻転横ナデ、半乾燥 時頂部寛けずり調整。	内面灰黄褐色。外面青 灰色。極く細砂で緻密 な胎土。 焼成硬い。
7	同 上 (B 106)	同上地点	器高4.5cm、口径14.5 cm。胴なかにくびれが みられる。 口縁部ゆがみがあり、 内転している部分もみ られる。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナデ、頂部寛 切り、寛起し。	内面灰白色、外面灰白 色で口縁部に近くなる 程灰色を呈す。 小礫片を含むが細砂で なめらかな。緻密な胎土。 焼成やや軟。

番号	器種	出土地点	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
8	坏 (53) (B 108)	玄室部表採 と矩形溝底 部より	器高3.5cm、口縁部は 両側より押され楕円形 に湾曲。 長径10.4cm、短径9.5 cm。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナゲ、外面削 部縦横ナゲ、底部寛切 り、寛起し	内外面共に赤黒色。外 面光沢を稱す。剥落部 は灰色。内部にマンガ ンの付着。細砂で緻密 な胎土。焼成硬い。
9	同上 (B 104)	墓道部東 2m地点 表土中より	器高部約3.3cm、口径9.8 cm。底部より口縁部へ の立ち上りに変化なく 直線的。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナゲ。底部寛 切り。	内外面共に灰色。 小礫片を含むが、緻密 でなめらかな胎土。 焼成硬い。
10	同上 (B 108)	矩形溝底部	器高3.4cm、口径8.8 cm。底部より口縁部へ の立ち上りは曲線で垂 直に近く、更に口縁部 で外転している。	ロクロ右廻転。内外面 共に廻転横ナゲ。底部 寛切り、寛起し。	内外面共に灰色。 小礫片を含むが、緻密 でなめらかな胎土。 焼成硬い。
11	蓋 坏 (4)	墓道部	器高3.8cm、口径11cm。 器高低く、蓋内内傾し 、蓋受けの立ち上りは 極端に内傾	輪ずみ。ロクロ左廻転。 内外共に廻転横ナゲ。 底部寛切り、寛起し。	内面N ₂ 灰色。外面N ₂ 灰色。砂粒を含むが、 緻密な胎土。 焼成硬い。
12	同上 (52)	玄室部表採	器高3.4cm、口径13.2cm。 器高低く、蓋受け水平 に近い凸型。蓋受け立 上り内傾。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナゲ。底部寛 切り、寛起し、内部 には鋭切り痕を消す為 の指頭ナゲ整形痕あり。	内外面共に暗緑灰色。 砂粒を含むが緻密でな めらかな胎土。 焼成硬い。
13	同上 (C 101)	墓道部西南 2m表土中 及び 矩形溝底部	小片の為器高不明。口 径約13.8cm。蓋受け内 傾し凹型。蓋受け立ち 上りやや内傾している。 底部に鎌創痕。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナゲ。底部寛 切り、寛起し。内部指 頭ナゲ整形。外面は剥 落している。	内面灰白色、外面灰色 に剥落した処は灰白色 をしている。粗砂及び 細砂多く含む緻密だが 粗い胎土。焼成硬い。
14	同上 (59)	玄室部表採	小片の為器高不明。口 径12.8cm。蓋受けは水 平に近く、蓋受け立ち 上り長く、少々内傾し ている。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナゲ。残存部 のみでみる限り外面低 部寛切り。	内面N ₂ 灰色。外面 N ₂ 灰色。4~5mmの 砂粒を含むが細砂で緻 密な胎土。 焼成硬い。
15	高 坏 (20)	玄室部左側 (伏せられ て)	脚部賦の高器高不明。 口径12.7cm。蓋受け水 平、蓋受けと蓋受け立 上りの間に溝あり、 長さ7cmの亀裂あり。	ロクロ右廻転。内外共 に廻転横ナゲ。外面低 部廻転寛切り。後脚部 横ナゲ調整。内面中心 部指頭ナゲ整形。	内面黒く前に煙を当て たか全面暗灰色。(黒 焼?)外面灰色。土粒 を多く含むが緻密な胎 土。焼成硬い。
16	同上 (B111) (B 104)	墓道部。表 道部。墓道 東2m地点	小片の為器高、口径不明。 蓋受け少々内傾。蓋受 け立ち上りも少々内傾。 器高不明、脚部径14 cm。	残存部をみる限り、ロ クロ右廻転。内外共に 廻転横ナゲ整形。	内面灰白色。外面褐色 色。細砂で緻密な胎土。 焼成やや軟。
17	同上 (16) (17)	玄室部	器高不明、脚部径14 cm。	ロクロ右廻転。脚部 のみロクロ上に逆に乗 せ内外共に回転横ナゲ。	内外面共に灰白色、断 面黄褐色。緻密でなめ らかな胎土。焼成温度 低いのか軟質。
18	高 坏 (脚2) (坏14)	墓道部 玄室部	脚部脚部多く器高不明。 杯部径12.8cm、脚部径 12cm。 蓋受け内傾。蓋受け立 上りの外部内傾し内 部上面外傾。	杯、脚部共にロクロ右 廻転。両方共に廻転横 ナゲ、杯部中心指頭 ナゲ、正調整し底部 の寛切り。後は横ナゲ 整形。接合部ナゲ	内面灰褐色、外面弱 灰色。脚部内面灰白色。 杯内側口縁部及び外面 約1/3はオーリーブ色の 帯あり、礫片を含むが、 細砂で緻密な胎土。 焼成硬い。
19	同上 (50)	玄室部表採	器高14cm。杯口径12.9 cm。脚部接合面径13.3 cm。脚部高く、脚部底 径に比して杯部小さめ。 蓋受け少々内傾し、蓋 受け立ち上りも短くて 少々内傾。	杯、脚部共にロクロ右 廻転。両方共に廻転横 ナゲ、脚部輪ずみ。脚 部上部はほぼ整形後 横ナゲ。杯底部接合部 後廻転横ナゲ整形。 杯内側指頭横ナゲ整形。	杯部内外面、脚部外面 灰色、脚部内面灰白色。 杯内側口縁部及び外面 約1/3はオーリーブ色の 帯あり、礫片を含むが、 細砂で緻密な胎土。 焼成硬い。

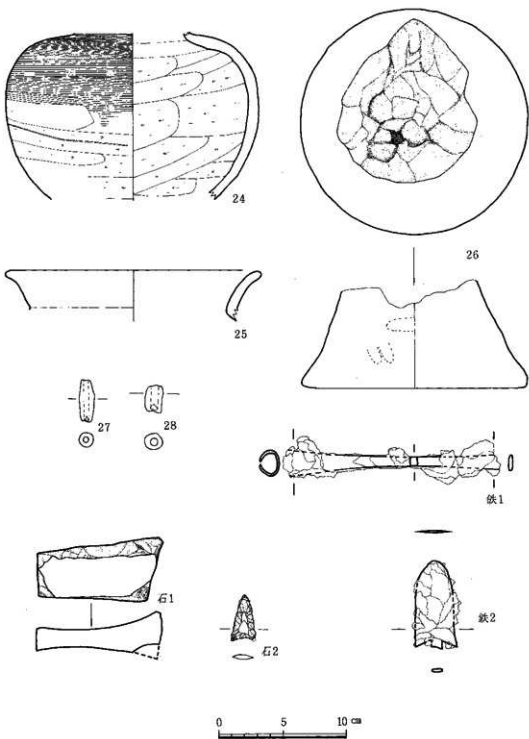
番号	器種	出土地点	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
20	同上 土師質 (55) (55)	玄室部表探	器高 12.6cm. 杯口径 16.5cm. 脚底径 13.3cm. 杯側の立ち上りは急傾斜で深く、ロクロを使用している。	ロクロ右廻転。脚部廻転横ナデ。整形後廻転横書き紋入れ。杯部廻転横ナデ。底部宮切り後接ぎ廻転横ナデ整形。	高杯内外面共に浅黄褐色。精練された細砂を含む緻密な胎土。焼成やや軟。
21	盤 (51)	玄室部表彩	器高 14.1cm. 杯口径 9.7cm. 脚底径 10.6cm. 左右不均等の盤。胴中に中約 1.5cm の凸帯、それには宮切り斜線紋あり。脚部には刃物による切り抜き穴(外面径 1.0cm. 内面径 0.8cm)あり。	ロクロ右廻転。盤部廻転横ナデ。胴中に凸帯状にしてその上下を篋に依る廻転溝を付ける。底部廻転横ナデ。脚部廻転横書き廻転横ナデ。盤を逆にロクロ上に置き、脚部接ぎ横ナデ調整。凸帯状部に篋による斜線紋入れ、脚部にすくい刃物で穴を切り抜く。	盤内面N灰灰色、外面5Y灰褐色、底部黒色が剥落し5Y灰褐色。脚部内外面5Y灰褐色。内面黒色が剥落し10YR灰黄褐色。盤部、脚部の接ぎ部は10YR灰黄褐色で盤部が脚部及び接ぎ用の土とごくわずかに異なる事が判明。細砂で緻密な胎土。焼成硬い。
22	杯 (B 105)	短形溝部上面流入土中	器高 5.1cm.、口径 15.3cm. 永底径 10.5cm. 口縁部への立ち上りが少々深い皿状の器に永底を取り付ける。外部底部より胴中にかげ3条の沈線あり。外転した永底が付いている。	ロクロ右廻転。横書き廻転横ナデ。ロクロ停止して底部永切り。杯をロクロ上に逆に置き、成形された永底を乗せ内外部指頭にて接ぎ、廻転調整後、永底外部及び接ぎ部を篋頭に廻転調整。	内外面共に灰色、伏せて焼いたらしく外面淡黄色に半面変化している。細砂で緻密な胎土。焼成軟。
23	提瓶 (8)	盛置部左側	口縁部狭張。胴中径約 20cm. 厚さ約 13.5cm. 均整のとれた形態、真円に近い胴、横より見れば左右の膨み殆んど対象。両肩部に駒手状の把手をもち、胴中央部両面共に同心円のかき目沈線。	ロクロ右廻転。内面向側の円形凹部はロクロ上に置いた台板か？。ナデ成形後、廻転横書き同心円沈線紋入れ。接合部おさえて大ききなナデ変形、口縁部廻転横ナデ、接ぎ部横ナデ、把手部同様横ナデ。	内外面共 7.5 Y 灰褐色砂粒を含む細砂な胎土。焼成硬い。
24	甕 (54.56.9.10 B108. B104) 土師質	玄室部表探。洗滌部。墓道部東 2m 表土中。短形溝底部。	口頸部、底部を缺損する。口は張り、なめらかに下降して、傘型になっている。	外面胴下部は寛削り、胴中より1部ナデ整形後肩幅はていどな横帯ハケ目調整。内面胴部は寛削り。肩部は指頭による横掻き整形。頸下部にかかる短形指頭ナデ剥落がひどく、成形不明。	内外面共に 5 Y R 灰褐色。外面に 10 R 赤褐色料塗布。細砂を含む緻密な胎土。焼成硬い。この甕片は各所より出土。
25	甕 (B 109) 土師質	短形溝底部	口径約 20cm の口頸部片。		内外面共に黄褐色。細砂を含む胎土。焼成軟。
26	不明 (B110) 土師質	短形溝底部	象形柄輪の台？。直径 17.5cm. 先端の欠けた円錐形。	ナデ、こねあげたものをらしく指頭圧取及びナデ跡あり。	全体に黄褐色。細砂を含む胎土。焼成軟。
27	土鉢 B 103 土師質	墓道東 2m 表土中	缺損部あり長さ不明(3.5~4cm)。太い所の径 1.1cm.		に濃い褐色。細砂で緻密な胎土。焼成硬い。
28	土鉢 51 土師質	玄室部表探	両端狭張及び厚縁はなはだしく大きき不明。		浅黄褐色。砂粒を含むめづらかな胎土。焼成やや軟。
他に表割不能土器 21点、内 1点は土師質。かまど 1点。杯、高杯片 9点。高杯胴片 2点。甕片 4点。盤片 1点。永底付杯 1点。大甕片 1点。不明土器 1点。近代土器片 1点。					
石器 2点。石 1 (磁石) 玄室部表探。上ト、両側の四面使用。灰白色の石灰岩？。軟質。					
石 2 (石鏡) 玄室部東北 5m 地点表土中より。					
鉄器 2点。鉄 1 (不明) 玄室部と表溝部中間附近、くずれ落ちた石及び土に混じって出土。					
鉄 2 (鉄鏝) 玄室部奥右側より出土。					



第6图 须惠器实例图(1)



第7圖 須惠器実測図(2)



第 8 图 土器、石器、铁器实测图

V 結 び に か え て

今回の調査では作業員として地元の人々に来てもらえなかった点で少々不自由を味わった。通常は地元の人々が作業員として発掘作業に従事しているので気付かずにいたが、地元の人々が作業員として作業に従事しているときの利点2・3あげて参考に供したい。

- (1) 地域に於いて埋蔵文化財知識の先駆者となり、進んで地域の人々に教えてくれる利点。
- (2) 自から地域文化財等の情報源となるほか、情報収集手段を教えてくれる利点。
- (3) 調査が順調に進展するよう自から進んで地域の人々に働きかけてくれる利点。
- (4) 作業員との人間関係から地域の人々が挙って、調査に協力してくれる利点。

1つ1つ教ぞえあげれば切りは無いが、以上のような大きな利点のあることに気付かずにいた。と云って今回調査に協力してくれた方々が非協力的だったというのではない。何をすることも安心してまかせっぱなしでいられた。調査従事者三名共知識、学識、細心さに於ても勝れていたからで、最高の協力者であった。

以上のことから地元の人々が非協力的だったと誤解されても困るので記載するが、興味をもって見学に来られた方々は、地方文化の情報源となってくれた。幕末時代辛川より稲井まで水路を作り、泥水を流し込んで扇井湿地帯を干拓しようと計画された今も残る安藤井手の件。第2図B地点の古墳は、地元では赤道の古墳と呼ばれ、それにまつわる話。

古岡温泉に在る古墳に就いても、壘れが出土品を所持し、どのように保存しているかとか。上光木で幽霊騒ぎが起り、誰れがどのように調査したかとか。辛川の現在墓地となっている処より須恵器が出土したとか。掘見の奥の山腹にある廃寺跡についてとか。調査者が発する質問に答えた上で、他の話を付加してくれた。これ等の事は今後調査し、機会があれば発表したいと考えている。

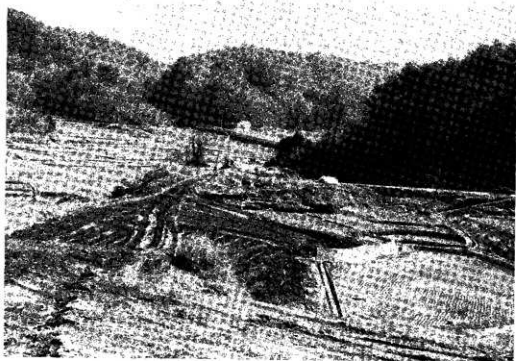
所で此の古墳は特異な面と不可解な点を有していた。特異な面とは、他に類を見ない矩形形の溝を有する古墳であること。不可解な点とは、その矩形溝の底部から羨道部や玄室部より出土の土器片と同一個体となる土器片の出土がみられ、更に右室石組と思われる石の落ち込みがあり、この古墳築造(7世紀初頭)後、早い時期に古墳が荒され、小破壊がなされたと思われるのに、羨道部には7世紀



調 査 風 景

初頭～7世紀中頃の須恵器が供えられていた。

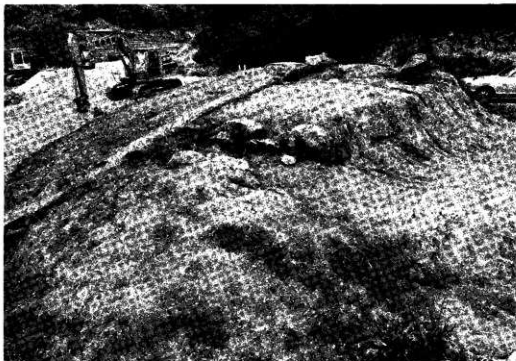
これ等の事から、荒され小破壊された墳墓にも追献供の礼がなされるのか。又は溝中の石は破壊された石組でなく築造時あまった石であり、墳墓に破壊の手が加わらなかったとすると、羨道部や玄室部への献供の品々は供える前にこわしていれるものなのかとの疑問が残った。



古墳遠望（北北西より望む）



調査前古墳（北より望む）



表土除去後（北より望む）



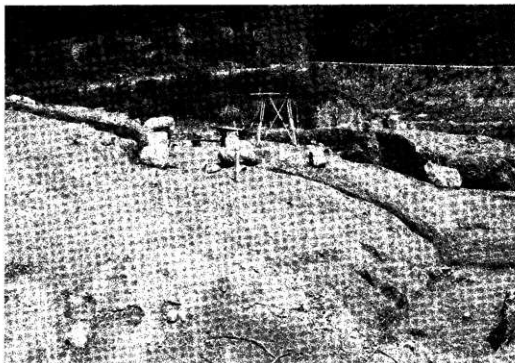
調査完了後（北より）



石室部 (北より望む)



石室 (北北西より望む)



石室（南南東より）



矩形溝（北北西より望む）



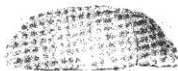
土器出土状況（南東より）



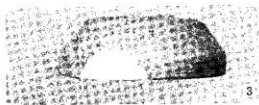
土器出土状況（南より）



1



2



3



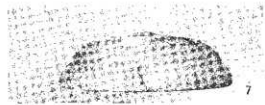
4



5



6



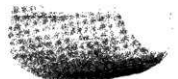
7



8



9



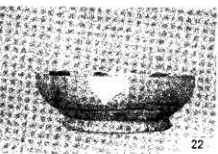
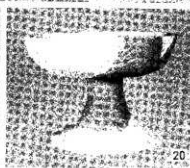
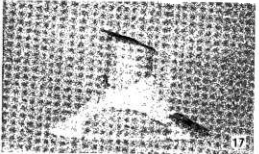
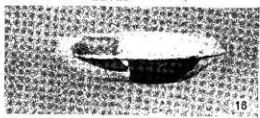
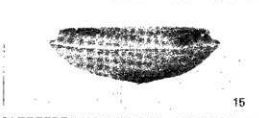
10



11

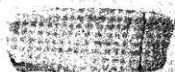


12

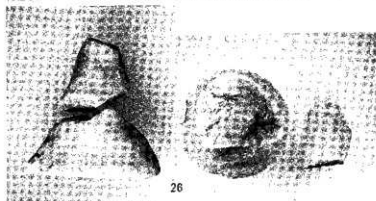




24



25



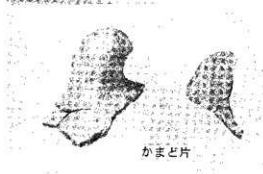
26



27



28



かまど片



石1



鉄1



石2



鉄2

鳥取市文化財報告書 8

「ヒル山砦」「熊田古墳」
発掘調査報告書

昭和55年11月印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会

印刷所 髙矢谷印刷所
鳥取市幸町96番地
